奥山廃寺（奥山久米寺）の調査

ー第 211-6 次

1　調査の経過

調査に至る経緯　本調査は、明日香村奥山における個人住宅の建て替えにともなう発掘調査である。工事範囲のうち、東南部を中心に調査を実施した。調査区は東西約 9 m、南北約 3 mで設定し、面積は 26㎡である。

作業の経過　調査期間は 2022 年 10 月 3 日から 12 日である。10 月 3 日に現場の設営をおこない、重機掘削を開始した。重機掘削の終了後、人力による遺構検出を開始し、10 月 6 日まで遺構検出および遺構掘削をおこなった。同日、全景写真を撮影し、その後、遺構平面図と壁面土層図を作成した。10 月 11 日、全ての作業を終え、遺構面保護のため、川砂を撒いた後、埋め戻しを開始した。10 月 12 日に埋め戻しが終了し、全ての作業が完了した。本調査の出土遺物は少量であり、調査終了後に洗浄・分類・注記作業をおこなった。

2　遺跡の位置と環境

奥山廃寺は、山田寺の西約 800 mの奥山集落内に存在した古代寺院である。集落各所におけるこれまでの調査で、西面回廊、塔、金堂などの位置が判明しており（『藤原概報 3』、『同 18』、『同 20』）、また、1995 年の調査で、講堂推定地に隣接する地点から礎石が見つかったことで（『藤原概報 26』）、地割り痕跡から推定されていた講堂の位置に関しても有力な手がかりが得られた。これらの調査成果から、伽藍配置は、塔・金堂・講堂が南北に直線上に並ぶ四天王寺式であったことがほぼ確定している。

奥山廃寺の主要堂宇については、東西幅 23.4 m、南北幅約 19 mに復元される金堂基壇が注目される。これは、山田寺金堂を上回り、川原寺中金堂に匹敵する大きさで、飛鳥時代の寺院のなかでも第一級の規模を誇る。ただ、これほどの大寺院であったにも関わらず、文献史料には確実な記述がなく、未解決の課題が多く残る。

今回の調査地は、奥山廃寺の塔跡から南東へ約 50 m の位置にある。塔跡の中心と 1972 年度の調査（『藤原概報 3』）で確認した西面回廊基壇の西端との距離は約 32 mで、塔跡中軸線を基準に東へ折り返し、東面回廊の位置を推定すると、東面回廊は本調査地の 15 mほど西を通る（図 54）。南面回廊については、これまでの調査で遺構などを確認できてはいないが、大阪府四天王寺の塔と中門の心々間距離（約 29 m）を、仮にそのまま奥山廃寺の塔－中門間の距離として当てはめると、中門に接続する南面回廊の復元中心ラインは、本調査地の約 3 m北を通る。つまり、本調査地は、中心伽藍を囲む回廊の外側で、推定される回廊東南隅付近から東へ約 15 mの場所に位置する。

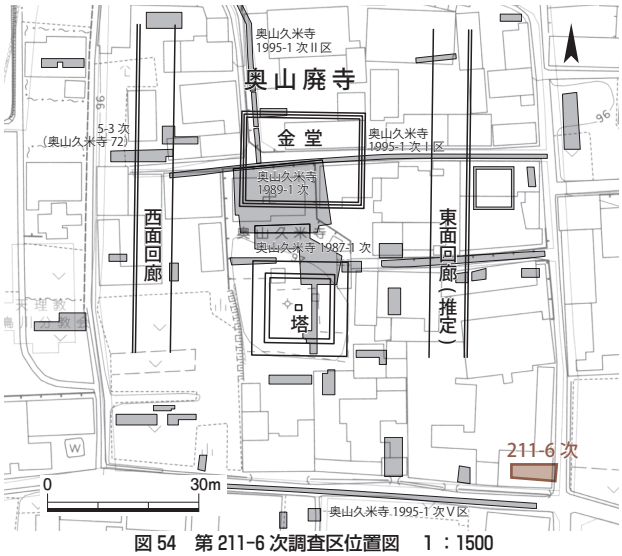

図 54　第 211-6 次調査区位置図　1：1500

3　調査の方法と成果

調査の方法　本調査では、GNSS 測量機を用いたネットワーク型 RTK 法で調査区内に基準線を設定し、縮尺 1/20 で平面図を作成した。標高は藤原基準点 No.204（X=－168,218.462、Y=－16,385.102、H=99.385m）からオートレベルで直接水準測量をおこなった。表土および現代盛土、耕作土は重機で掘削し、それ以下は人力により掘り下げをおこない、遺構検出および遺構掘削を実施した。また、写真記録はデジタルカメラを用いて撮影した。

基本層序　基本層序は、調査区西半で、上から、表土（約 10㎝）、現代盛土（15 ～ 25㎝）、黄褐色整地土（約 15 ㎝・時期不詳）、耕作土（5 ～ 10㎝）、地山。調査区東半で、上から、表土（5 ～ 15㎝）、現代盛土（15 ～ 25㎝）、暗灰黄色包含層（5 ～ 15㎝）、暗オリーブ色整地土（約 5 ㎝・時期不詳）、暗灰黄色整地土（15 ～ 25㎝・時期不詳）、地山である（図 55）。遺構検出は、調査区西半は地山面（標高 95.50 ～ 95.65m）、調査区東半は暗オリーブ色整地土面上（標

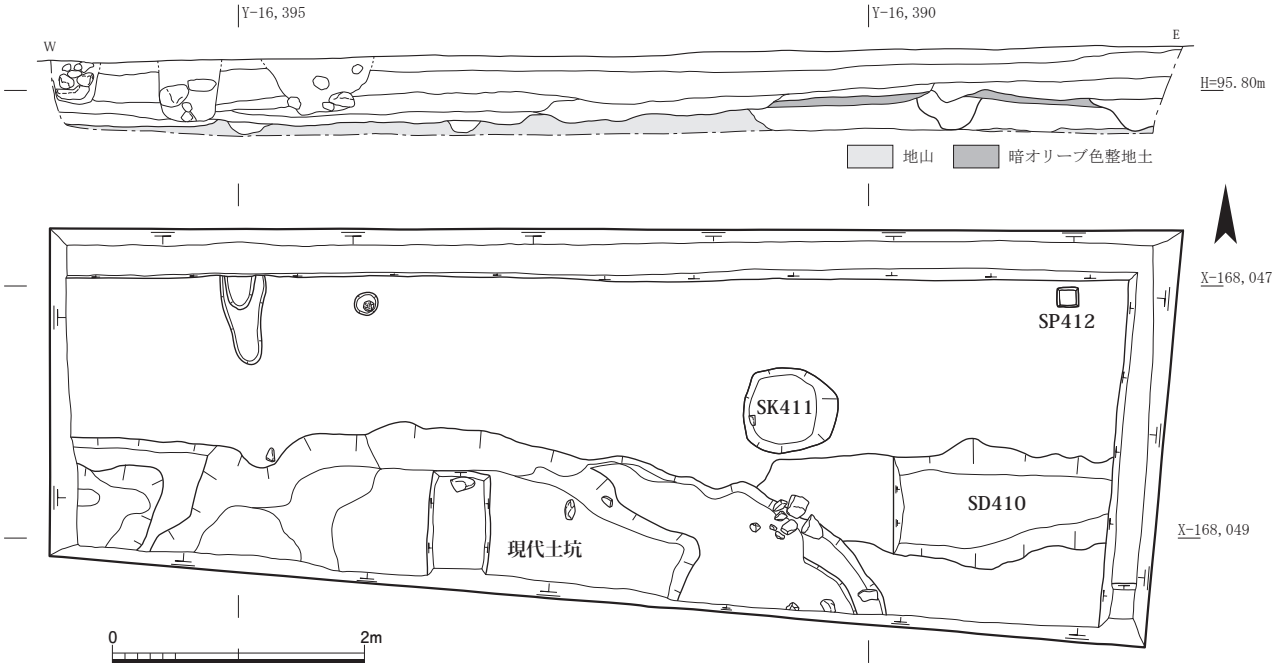

図 55　第 211-6 次調査区遺構図・北壁土層図　1：60

高 95.65 ～ 95.80m）でおこなった。

検出遺構　調査の結果、東西溝１条、土坑１基、柱穴１基を検出した（図 55、PL.11-２）。各遺構からは瓦や土器が出土しているが、小片が多く、量も少ない。また、調査区西半の地山面上では、南北方向の耕作溝を数条確認した。なお、調査区西南部は、現代の大土坑により大きく削られている。以下､主な検出遺構について述べる。

東西溝 SD410　調査区東部で検出した東西方向の素掘溝。2.8 ｍほどを確認した（PL.11-３）。幅 0.7 ～ 1.0m、深さ 25㎝である。Y＝－16,390.6m 付近で南に曲がるようであるが、屈曲部より南は、現代土坑により失われている。埋土より須恵器杯Ｂが出土した。

土坑 SK411　調査区中央東寄りで検出した円形の土坑。大きさは径 70 ～ 75㎝、深さは 45㎝である。

柱穴 SP412　調査区東北隅で検出した方形の柱穴。一辺 15㎝で、深さは５㎝。埋土より瓦器皿が出土。

出土遺物　調査区全域から瓦や土器などが出土した。瓦・土器ともに小片が多い。出土量は少なく、瓦・土器をあわせても整理用コンテナ１箱におさまる。なお、現代土坑の埋土上層から石鏃が１点出土した。

４　まとめ

今回の調査では、調査区東半の整地土上で土坑や東西溝を検出した。ただし、これらの遺構からは、少量の遺物しか出土しておらず、遺構の詳細な時期や性格を知ることはできなかった。また、調査区全体での遺物の出土量も瓦・土器をあわせて整理用コンテナ１箱と少なく、整地土や包含層の年代を絞り込むことも難しい状況である。

本調査区の６ｍほど南で実施された奥山久米寺 1995-１次調査Ｖ区の成果をみると（『藤原概報 26』）、標高 96.0m 付近で整地土を検出している。一方、今回確認した灰オリーブ色整地土上面の標高はそれより低く、95.65 ～ 95.80m であった。これらのことから、本調査区付近は後世の削平を大きく受けている可能性がある。調査区西半で検出した地山面上（標高 95.55m 付近）で、数条の耕作溝を確認していることもその傍証となろう。

上記のような遺構・遺物の状況は、調査区全体が後世の削平を大きく受けていたことも一因と考えるが、当初の推定通り、本調査地が、奥山廃寺の主要伽藍を構成する建物などからは距離があったことを示すものともいえる。今回の調査は、個人住宅の建て替えにともなう小規模なものであったが、今後もこのような小さな調査を積み重ねることが、奥山廃寺の当時の姿を明らかにするために重要となろう。

（若杉智宏）